日本人の「笑い」の談話機能—2—
出現率と場面

早 川 治 子

Discourse Analysis of Japanese Laughter -No2-
Co-occurrence between Laughter and Time／Formality

Haruko Hayakawa

In this paper, the author will examine the discourse analysis of Japanese laughter which has not yet received adequate attention in the past.

This research consists of the two steps. The first research has been done as a pilot study to the second step of the research project. Both of them examined the co-occurrence between laughter and time and laughter and formality respectively.

The results are as follows:

1. The low co-occurrence between the meeting session and the laughter.
2. The co-occurrence between the formality and the laughter increases in informal case, ordinary case and formal case in descending order.
3. According to the function of laugher, the laughter aiming to

make friends appears most often, especially during the rest period, on the contrary the laughter aiming to balance relationships appears more often in the morning session and the meeting than the rest period.

1. はじめに

早川1994（以下前稿と呼ぶ）は「言語と文化」第7号において日本人の「笑い」の談話機能上の意味を問うために、現代日本語研究会の共同研究による録音文字化資料を対象として「笑い」の持つ談話機能の実態の把握、意味分類を試みた。本稿は前稿に続くものではあるが、「笑い」の談話機能の意味の分類ではなく「笑い」の出現場面に焦点を絞って大小2種の調査を試みた。

2. 資料

前稿の資料は現代日本語研究会の共同研究によって収録したものであったが、今回も同研究会の資料巻末に「職場における女性の話しことば」の「データベース見本」として付加されたもの（以下これを第1次調査資料と呼ぶ）とそのデータベース見本の母体である「談話データ《総合》Ver1」（以下これを第2次調査資料と呼ぶ）を資料とした。しかし、両者とも整理分析途中のものであるため用語使用の整合性をはじめとして多々不備な点があることをお断りしておきたい。

■第1次調査資料:
「職場における女性の話しことば」収録「データベース見本」

30代高校教員、女性（以下HIと略す）と40代会社員、女性（以下HAと略す）の（ア）職場についてからの1時間（[朝]と記す）但し、ＨＩ朝は電話による会話のインフォーマント側のみの録音である。（イ）会議、打ち合わせなどの1時間（[会議]と記す）（ウ）休憩時間の1時間（[休憩]と記す） を文字化したものをそれぞれ１０分掲載したものである。内容は発話ごとに区切られ、それぞれの発話に発話者の別、直前発話の話者と発話の該当話者が同一人物か別人かの2項目のみが記入されている。

■第2次調査資料:

「談話データ《総合》Ver1」

第1次調査資料の母体となるもので20代から50代までの20人の女性の職場の自然談話資料を文字化したものであり、第1次調査用資料と同じく[朝][会議][休憩]の3つの場面からなる。しかしながら未だ整理の途中であるため資料すべてに５０近くある処理項目全部に書き込みが終了しているわけではない。しかし、総発話数が2万近くあるため資料的価値はあると考え、使用した。今後各場面を10分ずつ抽出し、処理項目すべてに書き込みを終了したもの（第3次資料を呼ぶ）が完成する予定である。

3. 本稿で扱う「笑い」の範囲と形態

前稿の分析は「おかしくなくても笑うこと」、例えば、以下の例のようなもののみに限って分析を試みた。

（1） あー、そうですか。有り難うございます。（笑いながら）

（HA・12）（注1）

本稿は上述のような笑いに限らず資料中の「笑い」すべてを扱った。というのは第2次調査資料が膨大であるため個々の発話のおかしさの有無の処理に長時間を要するためであり、またその判断には個人差があること、なおかつその判断は談話内容、談話者を熟知していなければできない点が多いことによる。

なお、笑いには「ほほほ」、「あはは」など種々の音声表現の形態があり、それぞれ意味が異なると考えられるが、本稿も前稿同様すべて「笑い」に一括し、その音色、長さについても考慮しないことにする。これは本稿の資料どちらもが「笑い」の音声表現の形態、長さを細かく採録していないことによる。また音として出ない「笑い」、いわゆる「スマイル」についても扱わない。

4.「笑い」の参加者

談話の参加者（話し手、聞き手）は同時に笑うことができる。ここに、「笑い」が他の言語行動と異なる特徴がある。普通、発話はturn-takingをしながら、談話線上に交互に現れる。もし両者が同時に発話するような場合は一種の破格と見なされる。これと対照的に「笑い」は、「爆笑」のような形で、話し手と聞き手が同時に談話に参加することができるのみならず、「笑い」は話し手、聞き手が同時に笑う場合が多く、話し手が笑うと笑っていなかった聞き手も誘い込まれるように笑う場合が多く、今回の資料にも数多く見受けられる。反対に話し手、聞き手の一方のみが笑う場合は、談話上それぞれ意味を持つと考えられる。1対多の場面においても、複数の聞き手が「笑い」によって、同時に談話に参加することができるのである。例えば、講演会などで、講演者の発言に聴衆が「笑い」で応じるような場面である。しかしながら本稿も

前稿と同様、談話の参加者の数を云々しない。これも本稿の談話資料が「笑い」の参加者数を細かく規定できないことによる。

5. 分析項目と方法

分析項目として本稿では次の3点に絞る。

1.「笑い」の場面による出現率
2.「笑い」のフォーマリティによる出現率
3.「笑い」の機能と出現率

方法としては第1次調査資料でパイロット調査を行い、より大きな資料である第2次調査資料で同じ分析項目を用いて調査を行った。しかし、3.「笑い」の機能と出現率は第1次調査の資料のみに限った。「笑い」の機能の確定が未だ一定していないことと、第2次調査資料が整理途中であるため今後発表される完全な第3次調査資料のほうを分析対象としたいと考えたからである。

6. 分析

6—1.「笑い」の場面による出現率

「第1次資料」及び「第2次資料」はともに[朝][会議][休憩]の3場面を採録している。それぞれの場面での「笑い」の出現する発話の比率を見る。

表1 第1次資料：「職場における女性の話しことば」収録「データベース見本」の「笑い」の場面による出現率

		HA	HI	HA＋HI
朝	「笑い」の出現数／ 場面の総発話数 総発話数比％	11／210 5.2％	20／301 6.6％	31／511 6.1％
会議	「笑い」の出現数／ 場面の総発話数 総発話数比	6／146 4.1％	7／242 2.9％	13／388 3.4％
休憩	「笑い」の出現数／ 場面の総発話数 総発話数比	11／216 5.0％	21／292 7.2％	29／508 5.7％
計	「笑い」の総出現数／ 資料別の総発話数 総発話数比	28／572 4.9％	48／835 5.7％	72／1407 5.1％

この結果では会議場面での笑いが他の二場面：朝、休憩に比して少ないことが注目される。特にそれはHIにおいて顕著である。これに比べて、朝、休憩相互には差が認められない。のみならず、HAとHIにおいて出現率が逆転している。つまり、HAにおいては、朝のほうが「笑い」の出現率が高く、HIにおいては休憩のほうが高いのである。とくにHA朝で電話によるインフォーマント側のみ録音であることを考え、相手側の「笑い」も想定するとその差は著しい。

そこで会議と会議以外のとき（朝＋休憩）を対比させ両者の「笑い」の出現する率に差があるかを調べるためにデータをHAの場合、HIの場合、HA＋HIの場合それぞれを2元分割表にまとめてカイ自乗検定を行っ

た。その結果、危険率5％の臨界値は3.84のところ、HAとHA＋HIは有意差が認められないが、HIの場合は5.07で有意差が認められた。つまり、HIの場合、会議では「笑い」がそれ以外の場面（朝＋休憩）の時より少ないと認められる。個々に差はあるが、全体としては有意であろうとの想定の基に第2次資料もその出現率を見た。

表2：第2次資料「談話データ《総合》Ver1」：場面別の「笑い」の出現率

朝	「笑い」総出現数／ 場面の総発話数 総発話数比	270／6148 4.8％
会議	「笑い」の総出現数／ 場面の総発話数 総発話数比	190／5126 3.8％
休憩	「笑い」の総出現数／ 場面の総発話数 総発話数比	472／7605 6.2％
計	「笑い」の総出現数／ 総発話数 総発話数比	752／18879 4.0％

これも同じく会議と会議以外の場面の「笑い」の出現率の差を調べるためにカイ自乗検定を行った結果、危険率1％の臨界値6.63のところカイ自乗値は17.8で有意差が認められ、やはり、会議場面はそれ以外の場面に比して「笑い」の出現は少ないことがわかる。又、百分率から1.休憩　2.朝　3.会議の順に「笑い」が多いことが認められるため、カイ自

乗検定を行った。危険率1％の臨界値9.21のところカイ自乗値46.6で有意差が認められた。朝の場面は内容的に打合せを行っているものもあれば、昨日の行動の報告を雑談として行っているものもあり、その日、その日、場合により多様であり、HAのように（朝）のほうが「笑い」が多い場合もあるが、個々に差はありながら、総体としては会議、休憩の中間に位置する内容であることが考えられる。

6－2.「笑い」とフォーマリティによる出現率

分析項目の一つにフォーマリテイというのがある。この項目はその発話及びその発話前後の談話の丁寧さを見るもので、基本的には研究分担者の直観によっている。書き込み選択内容はフォーマル（大）、フォーマル（小）、普通、インフォーマル（小）、インフォーマル（大）、不明に分かれている。フォーマリティ：あらたまり度によって「笑い」の出現率が異なる、つまり改まり度が大きければ、笑わない、改まり度が小さければーリラックスしていればーよく笑うのではないかと想定のもとまず第1次調査を行った。（注2）

表3　第1次調査　「職場における女性の話しことば」の「データベース見本」HIの「笑い」のフォーマリティ別出現率

フォーマル（大）	「笑い」／総発話数 総発話数比％	0／0
フォーマル（小）	「笑い」／総発話数 総発話数比％	1／20 5.0％
普　　通	「笑い」／総発話数 総発話数比％	15／265 5.7％

インフォーマル（小）	「笑い」／総発話数 総発話数比	32／509 6.3
インフォーマル（大）	「笑い」／総発話数 総発話数比	0／16
不　　明	「笑い」／総発話数 総発話数比	0／25
計	「笑い」／総発話数 総発話数比	48／835 5.7%

HIのファイルはフォーマリティの幅がフォーマル（小）からインフォーマル（大）までであるため明確な差がでていないが、インフォーマルのほうが「笑い」の出現率が高いことはとは認められるため第2次調査を行った。

第2次資料：「談話データ《総合》Ver1」：フォーマリティ別の「笑い」の出現率

表3

フォーマル（大）	笑い／総発話数 総発話数比%	2／694 0.3%
フォーマル（小）	笑い／総発話数 総発話数比	191／5654 3.4%
普　　通	笑い／総発話数 総発話数比	72／1164 6.2%
インフォーマル（小）	笑い／総発話数 総発話数比	155／3046 5.1%
インフォーマル（大）	笑い／総発話数 総発話数比	306／4778 6.4%

不　　明	笑い／総発話数 総発話数比	0／25 0%
計	笑い／ファイル総発話数 総発話数比	726／15361 (注3) 4.7%

この調査結果も全体としてはインフォーマルの発話のほうがフォーマルより「笑い」の出現率が高い傾向が認められる。カイ自乗検定をフォーマル（フォーマル(大)＋フォーマル(小)）、普通、インフォーマル（インフォーマル(小)＋インフォーマル(大)）の3段階に分けて行った。その結果は危険率1％の臨界値は9.21でカイ自乗値は69.08で有意差が認められた。しかし「笑い」の機能によりその出現率はかなり異なるのではないかと推定される。例えば、「仲間造り」の「笑い」はインフォーマルの場で多く出、バランスをとるための「笑い」は（注4）フォーマルの場で多く出るのはないかと想定される。

6—3.「笑い」の機能と出現率

前稿において「笑い」は、A：バランスをとるための「笑い」、B：仲間造りの「笑い」、C：フィラー（Filler）としての「笑い」に大きく分けられた。Aは1. 照れによる「笑い」2. 恥による「笑い」3. 実質的内容を軽くするための「笑い」に下位分類されている。この種の「笑い」は要求表現、命令表現、コメントの表現、提案表現とともに現れることが多いことも注目すべき点であった。Bもまた1.場面を盛りあげる「笑い」、2. 人を誘い込みたいときの「笑い」3.共通理解をもつ仲間うちの「笑い」、4. 親しみの「笑い」に下位分類される。Cもまた1. ごまかしの「笑い」、2. とりあえずの「笑い」に分類される。これらすべての

「笑い」の網羅的分類ではないが、本稿ではこの分類を基準として、第1次資料：「職場における女性の話しことば」の「データベース見本」の「笑い」の機能を分類した。

第1次資料：「職場における女性の話しことば」の「データベース見本」の「笑い」の機能分類（注5）

表4

	Aバランス	B仲間造り	Cフィラー	不明	計
HI朝	5	14	0	1	20
HA会議	1	5	0	0	6
HI会議	2	4	0	1	7
HA休憩	0	11	0	0	11
HI休憩	0	18	3	0	21
計	8	52	3	2	65

A B Cの比率としてはB：仲間造りの「笑い」が圧倒的に多いことがわかり、休憩場面に多く出現する。反対にA：バランスをとるための「笑い」はB：仲間造りの「笑い」ほど多くはないが、朝、会議の場面に出現していることが特徴的である。反対に（休憩）の場面には出現していない。

6. おわりに

以上の分析から会議の場面及びフォーマリティが高い時に「笑い」の出現が少なくなる傾向があることがわかった。また第2次資料においては1. 休憩　2. 朝　3. 会議の順で「笑い」が多いことがわかった。「笑い」を機能別に見た場合、この第1次調査資料内ではB：仲間造りの「笑

い」が全「笑い」の中での出現比率が高く、休憩場面に多出し、A：バランスをとるための「笑い」は朝、会議の場面に出現する。今後完成する第3次資料を用い、機能をより明確にするとともに、場面、フォーマリティのみならず、発話者間の人間関係を視野に入れて分析を加えたい。

（注1）　数字は発話番号

（注2）第1次調査資料「職場における女性の話しことば」の「データベース見本」はHI、HAの2種のファイルからなるが両者とも「職場における女性の話しことば」に発表の時点ではフォーマリテイ項目の書き込みがなかったが「談話データ《総合》Ver1」の時点でHIのみ書き込みがなされたので本稿はHIの部分のみ抜き出して調査した。

（注3）第2次資料のフォーマリティの項は、すべてのファイルにおいて書き込みが終了しているわけではないので、抽出できなかったものもあるため表2と表3の総発話数が同一ではない。第3資料による再分析が必要である。

（注4）6-3の頁参照。

（注5）「HA・朝」は電話での会話であるため分析から外した。

（注6）今回は「おかしさ」を感じる笑いも対象にしたが、それらはすべてB：仲間作りの笑いであった。

参考文献

海保博之 原田悦子　（1993）『プロトコル分析入門』光明社

野村雅一（1994）「変容する笑いの文化」『言語』Vol.23. No12,大修館書店

橋元良明（1994）「笑いのコミュニケーション」『言語』Vol.23・No12,大修館

早川治子（1994）「日本人の「笑い」の談話機能」『言語と文化』第7号　文教大学言語文化研究所

Sacks,Harvey（1992） Lectures on Conversation, Blackwell

Stubbs,Michael （1983） Dicourse Analysis : The Sociolinguistic Analysis of Natural language, Basil Blackwell

山口昌男（1990）『笑いと逸脱』ちくま文庫　築摩書房